

## 「考える力」を育てる評価と支援

志賀町立富来小学校

## 1 研究の概要

統合初年度である昨年、「わかる算数、楽しい算数」の授業を目指し、研究体制づくり・指導法の模索・少人数指導の立ち上げ・評価規準の焦点化などに取り組んだ。児童には算数の学習をより楽しいと感じるようになる意識の変容が見られ、算数好きな子が増加した。算数を好きになっても算数に自信をもつ域にはなかなか届かないことから、本校児童が苦手としていることの克服が課題となった。

基礎学力調査等の結果により、計算は比較的速く正確にできながら、文章問題の解決に不安がある児童の姿が明らかになった。「算数ができるようになった」と感じるためには、文章問題の解決で考えを進める力を育て、達成感を獲得することが求められる。そこで「考える力」を育てるための効果的な指導と評価のあり方に焦点化して研究を進めた。

## A-1 研究の構想図

## 2 研究内容 考える力を育てる評価と支援

## (1) 評価規準の焦点化&lt;見取りのポイント&gt;

規準に到達しようとしているか否かを、児童のどのような具体的な姿から見取るのか。効率的に、しかもしっかりと見取るためには、評価規準の具体化が必要と考えた。

例えば、5年「変わり方のきまり」の第2時では、「伴って変わる2量の関係を数が少ない場合から順に調べ、表に表してきまりを見つけ、問題を解決する。」という数学的な考え方に関する評価の規準がある。具体的に、どんな問題においてどのような考える活動を行えば、この規準の到達に向かうと見取るのか。

\_\_\_\_\_部を、本時により具体化させ焦点化した<見取りのポイント>は「正三角形の段の数とひごの数の変化に気づき、表の縦や横に線や数を書き込む。」となる。表の縦や横に線や数を書き込む姿をもって「きまりを見つけている」と見取るのである。

課題解決場面においては、この<見取りのポイント>で短時間に評価し、児童の次の活動につながる支援を心がけた。

## (2) シール利用などによる即評価・即支援

<見取りのポイント>で「評価規準到達の方向に向かっている」または「到達している」「到達の方向に向いていない」と見取ってすぐに行うのが、個に応じた支援である。この個に応じた支援を、迅速にしかも評価記録にもなる方法として、事前に準備した本校独自のシールを児童のノートに貼る方法を開発した。到達の方向に向いているなら[その調子で]到達しているなら[ほかの方法で][発表できるよ]のシールを、到達の方向に向いていないならヒントカードを段階に応じて提供する。授業終了後には、必ずノートを回収し、シール貼付状況や適用問題のクリアの成否を確認する。この方法によって、課題解決時に児童の思考を支援し次の考えを伝える活動につなげるとともに、授業内での評価記録の不足を補い、次時にその評価を生かしていく。

## (3) 変容を見取る&lt;考える力カルテ&gt;と&lt;算数日記&gt;

求める「考える力」のどれが身についてどれが未熟であるかを単元ごとの<考える力カルテ>に記入していき、その変容を見取る。また、個々の未確認の力については、個に応じて声かけや質問等で確認する。また、単元の初め・中・終わりに記述する<算数日記>で、個の考えの変容を単元内及び長いスパンで見取る。自己評価として、この<算数日記>のほかに<ふり返りカード>も活用する。

B-1 本校が求める考える力

B-2 考えを進める手がかり

B-3 学び合いのステップ

B-4 考える力カルテ

B-5 算数日記

B-6 ふり返りカード

### 3 指導の実際（6年 「体積」から）

(1) 見取りのポイントを設定し、評価規準の焦点化を図った。

(指導計画の第4時)

主な評価規準	見取りのポイント
L字型の立体の体積の求め方を考えている。	L字型の立体の見取図に補助線を引いて2つの直方体に分割したり、付け加えて大きな直方体にしたりして考えている。

(2) 見取りのポイントを用いて即評価・即支援を図った。（発展的な内容を含むコースの指導案から）

学習活動

**《L字型の立体の体積を工夫して求めよう》**

2 課題解決をする

① 直方体に分ける ②補って直方体にする ③変形して直方体にする

④ 2つで直方体にする ⑤ 1段目の何倍かで考えて

評価場面

**見取りのポイント**

L字型の立体の見取図に補助線を引いて2つの直方体に分割したり、付け加えて大きな直方体にしたりして考えている。

**手立て**

考えが浮かばない子にはL字型図形を渡し求積方法の想起を促す。シール利用により、途中までの思考を認め他の方法での解決やより良い考えの検討を勧める。

## C-1 指導案

### 4 成果と課題

#### (1) 成果

- ・評価規準の焦点化を図って設定した見取りのポイントにより、児童の活動の様子を効率的に見取ることができた。一人一人の児童の考えの過程を1つの具体的な姿を求めて見取ること、規準への到達が可能かどうかを評価し、状況に応じた次のステップへの支援を行うことができた。課題解決に向かっているか[すでに課題を解決しているか][支援を必要としているか]を短時間に評価し、支援につなぐことができた。この取り組みにより「考えを進める力」を見取ることと「手がかりを生かして考えを進める力」が育ってきた。
- ・シールや付箋紙を使うことにより、個に応じた支援を効率よく行え、事後のノート回収で考えの変容や評価記録の確認を行うことができた。この取り組みにより「考えを進める力」を即評価し即支援できた。
- ・「考える力カルテ」により、個々の考えの変容を把握し、支援が求められる力を次時で指導していくことが可能となった。また、算数日記は単元内の考えの変容の見取りや本人の気づきに有効であり、同時に「自分の言葉でまとめる力」が確実に育ってきた。

#### (2) 課題

- ・評価記録の効率化を図るため、より有効な評価方法の開発が必要である。
- ・算数科を通して取り組んできた指導と評価を、他教科へ広げていかなければならない。特に、評価規準の焦点化を図る<見取りのポイント>を各教科に導入していくことが学力向上につながると考える。